広報誌

ある群像

2017年5月号

公益社団法人 好善社
東京都目黒区中町1−7−4
〒153−0065
電話：03−3712−3845
Fax：03−3791−1150
2017年5月25日
発行 三吉信彦
編集 長尾文雄

「新緑の桜並木」　多磨全生園資料館通り　撮影：川﨑正明

創立一四〇周年を覚えて

好善社は今年、創立一四〇周年を迎えます。設立当初はB六番女学校（現女子学院）の生徒たちによるボランティア活動でしたが、やがてハンセン病を病むひとりの女性と出会い、以来ハンセン病を病む人々と療養所とに長く関わるようになりました。その好善社の活動と歴史は、『ある群像ー好善社一〇〇年の歩み』（一九七八年）、また当誌各号に記されています。

二〇一四年、好善社は公益社団法人の認可を受けたのを機に、私たちの働きをより明確に内外に明らかにするため、以下の三つの項目にまとめることにしました。

公益事業一　国内の訪問活動
公益事業二　広報・啓発活動
公益事業三　海外支援活動

一は終焉に向かう療養所に今こそ心を込めて関わること、二は特に次世代にハンセン病の歴史を伝えること、三はタイ国チャンタミット社ほか近隣国への支援と協力活動です。

これからも好善社を応援して下さいますよう、お願い致します。

代表理事・三吉信彦

入所者の「いま」を聴く＜7＞

人生の終焉は、全ての人に必ず訪れます。ハンセン病を病んだが故に、重い人生被害を受けてこられた入所者が、「いま」をどのように心の内に留めておられるかを聴かせていただきました。

（インタビュー：長尾文雄社員）

今回は、岡山県瀬戸内市にある邑久光明園の花村慶子（はなむら・けいこ・八二歳・入所七一年）さんに伺いました。

―入所はどのような経緯でしたか。

花村　親は私の小さい時から病気だと分かっていたみたいです。私も学校に入った頃には、斑紋がでていたことに気づいていました。母親と叔父、妹に付き添われて入所。小学校四年生、一一歳の時でした。

祈祷会で司会をする花村さん

―教会に繋がったのは？

花村　入所の翌朝、母親たちがおらなくて私が泣きわめいていたら、福祉の人から「宗教はどこですか」と。泣いている状態だったし、そんな判断もできるはずもないので、子供やから教会でいいということになったようです。

子供舎には相良お母さんという方がおられて、朝部屋で四、五人が寝ているでしょう、起きたらなんか知らんけどお母さんが本読んではるんよ、後で分かったのは聖書でしたね。相良お母さんの影響が一番でしたね。

―当時の教会はどんな感じでしたか。

花村　礼拝は図書館横の小さな集会所であり、たくさんの出席でした。当時は家族教会の名前のとおりに阿部お父さん、相良お母さん、津島お兄さんと呼んでいました。家族的な環境で、大人の人ばかりで、幼かった私は皆に可愛がってもらったという感覚でしたね。

―花村さんの今の教会生活はどのようなものですか。週報の作成などの奉仕をしておられるようですが。

花村　若い時からワープロが好きで買ってもらって遊んでいました。週報をガリ版で作成していた津島久雄先生から「慶ちゃん、週報しないとダメ」と言われて、引き受けたのが五〇歳の頃です。だんだんと頭も目もついていかなくて、その上自分で校正するから間違いだらけですよ。

―今の家族教会の様子は？

花村　平均年齢が八五歳を過ぎてくると、病気で来られなくなる人、足の衰えで教会の坂がきつくなる人などが多くなりましたね、今は日曜礼拝と祈祷会には外からの先生方のご奉仕に頼っています。園内からの出席が本当に減って申し訳なく思っています。しかし、岡山の先生方が幼い子供さんを連れて来られるので、子供の声が響いて、私たちは元気をもらっています。

―家族教会の礼拝・祈祷会の今後は？

花村　今でも少なくなっているのですから、平均年齢から考えても来られなくなる人、亡くなる人がでることは、覚悟しています。でも応援してくださる先生方は、たとえ一人二人でも来ますよと言ってくださっています。そして、外部の信徒や参加者に支えられていくことでしょう。ありがたいです。

―今後も週報だけではなく、教会の役割が多くなってくるのでは？

花村　そうですね。週報は卒業したいのですが、離したら何か寂しいですしね。それに会計も任せられています。昨年から骨折などで入退院繰り返したでしょう、もう辻褄を合わせるのに大変です。

―ご自身の生活は教会中心なのですね。礼拝の司会や聖餐式の準備など引き受けられているのですね。

花村　八二歳でも若い方なので迷惑をかけながらなんですが、時々落ち込むのですがね。でも応えない性分と、生き方がいい加減なので、恥をかいたり、何とかなるかなと思ったりの繰り返しです。後は神様にお任せですね。

―ありがとうございました。花村さんのご健康をお祈りしています。

（取材＝２０１７年４月５日）

ハンセン病療養所に生きる人びとの「いのちの証」10

川﨑正明・記

随筆集　『曼珠沙華』

津田せつ子

「夫の立ち日から数えて百か日は、九月十八日だった。雨の多かった夏のあとの残暑はいつまでも厳しかったが、それでも九月半ばを過ぎると、どこかに秋の気配が漂ってくる。夫の霊前に生き生きとした花を供えたいと庭に下りた私は、紫陽花が葉を大きく茂らせている傍らに、雑草にまぎれて一本の赤い花が咲いているのが眼にとまった。曼珠沙華である。この花を私は好きでなかった。一葉もつけず、細い裸の茎の頭に、真っ赤にそれこそ燃えるように咲いている曼珠沙華の花は何か不気味であった。でもこの日、私はどうしたことか、この花にふと夫の生きる姿を感じたのである。潮（うしお）のように悲しみが胸に突きあげてきた。裸の茎の頭に真っ赤に、それこそ燃えるように咲いている曼珠沙華の花。何も求めず、ひたすら他者のために生きた夫・・・夫の心に燃えていたのは、神への愛、炎のような愛の灯である」

（本文一九～二〇頁）

曼珠沙華九月の花とおぼえたり
夫の立ち日に燃えて眼に映ゆ

津田せつ子（つだ・せつこ）

本名は渡辺立子。一九一六年（大正五）栃木県に生まれ、小学校三年頃発病。一九三三年五月、兄の詩人・東條耿一がいた全生病院（現・多磨全生園）に一七歳で入所。一九六〇年より十五年間少女寮の寮母を務めた。一九四〇年、全生園カトリック愛徳会信徒の渡辺清二次郎氏と結婚。二〇〇三年三月二五日、八六歳で逝去。在園七〇年。随筆集『曼珠沙華』（一九八一年私家版、一九八二年　日本キリスト教団出版局より再版）、随筆と短歌集『病みつつあれば』（一九九八年　けやき出版）を出版。前者の中から一六篇が『ハンセン病文学全集』（第四巻）に収録されている。

「療養の明け暮れを過ごした多磨全生園は、私にとって、身も魂も生かされた終生のふるさとである」「病を得たことは、私にとって神の選びであった。そして火のような信仰をもって生き抜いた夫の傍に置かれたことも、神への従順と愛を徹底して教えられた恵みであったと思う」。『曼珠沙華』の「はじめに」と「あとがき」の言葉が、作者の「いのちの証」であり、信仰告白であろう。

上記は本書からの抜粋。園内の一隅に開花した一本の曼珠沙華は、亡き夫が燃やしたこころの花、いのちの花だった。凛として、真直ぐに背筋（茎）を伸ばして「私は曼珠沙華よ」と咲く花に夫の生き方を重ねて、作者はきっといのちの尊厳を見たのではないだろうか。「あとがき」の最後に「亡夫に捧げる意味で、この本の題名を『曼珠沙華』とした」とある。曼珠沙華の別名は「彼岸花」、多磨全生園では、今もお彼岸の頃に随所に咲いている。

宮古南静園を訪ねて四〇年

「トミおばあとハルヨドリ」

阿部春代社員と入所者トミさんとの交流物語

国立療養所宮古南静園

私は今年タイ国に来て二八年目になるが、この出発点が宮古南静園と思っている。一九七八年、ナナサンマル（七月三〇日）と呼ばれた左側運転から右側運転に切り替わる一週前に宮古島入りし、そこで初めて車を運転し二年七カ月過ごした。今と同じく好善社から派遣の形で、午前中は南静園の不自由者棟で、午後は宮古スキンクリニックで看護の一部に協力するという生活だった。その後の邑久光明園勤務の時も南静園訪問を続け、タイに移住してからも勿論続いている。十数年前までは、長い知り合いの個人を訪ね、また不自由者棟での運動時間に仲間に加えていただいてきた。雨宮恵牧師を案内した二〇〇七年には、与那覇次郎さんが絞るような声で挨拶をされ、他の数名から「南静園を忘れずに」との言葉を聞いたことが忘れられない。長い年月の中で古くからの知人と再会できなくなったが、かつてあまり話をしたことがなかった人たちが声をかけてくれるようになり、最近は一般舎での朝の体操に加えていただいている。

長い知り合いで私を娘のように思ってくれる人が現在一〇〇歳のトミさんである。南静園に一年住みどうにか高齢者との会話ができるようになり、五、

遥かなる海を越えて タイと宮古を往復

阿部春代

昨年の一二月、トミさんのお世話をしている方が「ハルヨドリを見たか？」と何度も私に言った。私は何のことかわからずにいたが、山田たまんさん作の『トミおばあとハルヨドリ』の小冊子をトミさんの部屋でみつけて、この話かと納得、その冊子を開いて食い入るように見入った。そこには、私とトミさんとの関わりが物語風に見事に並んでいた。それは、電話で話を聞いてきた山田さんが創作したトミさんへの贈物であり、ハルヨドリと名付けられた私が嫌な思いをしていないだろうかと心配しているという。私は山田さんのことを随分前から聞いているが、私とトミさんも出会ったことはない。この小冊子の出現に想像すらできない驚きと喜びを感じ、私は宝物を得た思いで頁ごとに写真を撮り帰った。

六名のおばあたちに声をかけて聖書を共に読み、共に賛美をする集いを週一回、夕方一時間始めたことがあった。「キリストの教会」では高齢者が多く、礼拝に集うことが困難だったからであった。その場を提供し世話役をしてくださった人が、言葉が通じ合えるトミさんだった。私は一九八一年二月一日に南静園での生活を終えて宮古島を離れたが、この集いはその後もトミさんが先頭で一九八五年五月まで続いた。その後私が訪問した二〇〇六年五月の集会が最後で、八六回の記録となっている。

トミさんは九〇歳頃から身の回りの整理を始め、まだ利用できる古着をいただいて私はタイへ運ぶようになった。九二歳の時には、頼りにしている人に最後の整理と自分の意向を伝え始め、「体がしんどく、数カ月先に命があるかどうか」と言われる。その言葉が私の耳に残り、それ以来できるだけ年二回は訪問しようと思っている。因みにこれが可能なのは、タイからの東京料金と東京経由で那覇料金がほぼ同じということがある。

カメラに収めた『トミおばあとハルヨドリ』をA4紙一枚に並べ、文字はできるだけ元に沿った行にして打ちなおして印刷をした。これを見た姉が「行ってみたい」と言い、この五月の帰国時に二人の姉を伴い南静園訪問が実現した。

本当に予想もできない「トミおばあとハルヨドリのドラマ」の展開は、宮古島との出会いの四〇年記念となった。

トミおばあとハルヨドリ（春代島）

作・山田たまん

トミおばあは、百さい、
百年も生きたので、体のあちこちがギシギシと、いたい。そして、朝おきたときから、ぐったりと、つかれている。
まるで、ねむっている間に、長い旅でもしてきたみたいに。

――今は冬、さむくなると、トミおばあは、ますます、ぐったりする。
でも、もうすぐ、ハルヨドリがやってくる。
ハルヨドリは、やせていて、太陽のにおい。
肩に大きなリュック、澄んだ瞳、

ハルヨドリが どこまでも とべるのは、
このリュックの中に、ハルヨの花の種が、
ぎっしりつまっているからだ。

ふじぎなことに、ハルヨの花の種を、
ぜんぶだれかにあげても、
からっぽになったリュックは、
すぐにまた、いっぱいになる。

ハルヨドリは、トミおばあの娘ではない。

ハルヨドリとトミおばあは、血はつながっていないが、たましいがつながっている。

たましいが、よびあうので、
ハルヨドリは年に二回遠い遠い国から、
トミおばあのすむ、南の小さな島へ、とんでくる。

この前、ハルヨドリが遠い国へもどった日から、トミおばあは、ハルヨドリをまっている。
それはもう、胸がくるしくなるくらい。
何日も 何日も、何日も――

そして、ついに、オリーブ色の風といっしょに、空からハルヨドリがはいってきた。

トミおばあの部屋の中に、ハルヨドリのリュックの中のハルヨの花の種が、ザザッーとこぼれた。

次のしゅんかん、種がいっせいに芽を出し、見る間にスクスクとのびて、つぼみがふくらみ、
トミおばあの部屋いっぱいに、春の色のオレンジとピンクの花がさいた。

ハルヨドリが、つばさを広げて、トミおばあにだきつく。
「あいたかったよ、トミおばあ」
「おかえり、ずっとまってたよ」

キャンパーたちのその後

地域医療に携わって

医師　吉田隆一郎

一九七三年の夏、大学三年生の時に松丘保養園で開催された好善社のワークキャンプに参加しました。これは当時行っていた長崎古町教会の棟居勇牧師に勧められてのことでした。学生と社会人が共に過ごし、作業・訪問・懇談と、濃密な時間を過ごしました。この時の主題は「人間関係を考える」だったと思います。「私とあなたという関係を回復するには何が必要か」、「差別とは何か」、「人はなぜ差別するのか」などのテーマを療養所の中で考えることに意味があったと思います。この後、翌年にもう一度松丘保養園、そして宮古南静園でのワークキャンプに参加させていただきました。また棟居牧師のお供をして、大島青松園を訪問したこともありました。

故藤原偉作理事長の思い出話を二つ紹介させてください。沖縄への出張の際、博多で音羽鮨という理事長行きつけの寿司屋に入る時のことでした。「吉田君はたくさん食べるから寿司屋に入る前に、隣の食堂で何か丼ものでも食べてきなさい」と言われ、素直に親子丼を食べてから理事長に寿司をおごってもらったことがありました。また僕は、卒業してまだ就職する前に結婚式を挙げましたが、その結婚披露宴に出席していただいた理事長に当日、新郎側の主賓挨拶を突然お願いし、ためらいながらも快諾していただきました。後日このことを「あの時は突然でびっくりしたよ」と言われてお詫びをしたことが忘れられません。

あれから四〇年余り、知り合いだった入所者の方々や同労のキャンパー達の幾人もが他界し、自分も髪が白くなる年齢になりました。現在は家庭医として地域医療に携わっていますが、患者さんの病気の背後にある悩みや苦痛、困窮に思いをはせながら、一緒に病気に立ち向かっていこうという姿勢で日々の診療を行っています。このような自分の姿勢は、かつてのワークキャンパーや療養所の方々との関わりの中で形作られたことを強く感じています。藤原先生、キャンパーの皆さん、そして入所者の皆さん、本当にありがとうございました。

【写真・高松―大島官用船乗り場にて筆者夫妻と棟居勇理事夫妻（左・筆者）】

本の紹介

ガブリエル＝シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ作／藤原真実訳
『**美女と野獣**』（オリジナル版）
白水社・2016・12・10発行

本書の題名は、民話をもとにしたディズニー映画で知る人が多いと思われるが、本書は「訳者あとがき」によると、原著は一七四〇年刊行の物語集『アメリカ娘と洋上物語』と題する妖精物語集の第一話として書かれたもので、その本邦初訳である。

これを本欄で紹介することを意外に思われる方がおられるかも知れないが、理由は訳者が好善社社員だからだけではない。この物語が読者に投げかけているのは、私たち人間はうわべだけの美貌と醜さ、才気と愚かさ、善良さと邪悪に弱い生物であるから、そうした目に見えるものだけで判断するという壁を乗り越えられるかという単純ながら厳しい問いである。

これは偏見と差別の問題にも関わる重要な問いであり、ハンセン病問題に取り組む者が本書を読む時、大いに考えさせられる問題点を示唆しているように思われる。

（好善社社員・棟居洋）

好善社短信

◆好善社社員協議会開催される

風薫る五月の連休、まさに新緑が目にまぶしい京都・修学院の関西セミナーハウスで久方ぶりに社員協議会が開かれました。講師は元長島愛生園医長の尾崎元昭医師。ハンセン病の基礎から専門的な先端医療まで、分かりやすく丁寧にお話し下さいました。終末に向かう療養所に、今後どう向き合うかを真剣に話し合いました。好善社社員たちの今後の活動に、乞う、ご期待！

◆ラオスのハンセン病医療従事者の訪日研修予定

五月二五日～三一日、ビエンチャンの国立感染症対策センターの所長、医師、看護師長が好善社の招きで来日、多磨全生園、長島二園を訪問、研修されます。チャンタミット社のユパー師も同行、通訳されます。タイ国近隣国への支援につながればと願っています。

日本の入所者を中心とした基金「タイ国ハンセン病施設教育基金」

2016年度送金額	862,604円
2017年3月末　基金現在高	1,021,295円
2002年～2017年3月末　基金献金総額	18,892,922円
2003年度～2016年度　基金送金総額	18,370,395円
	（延べ奨学生数777名）

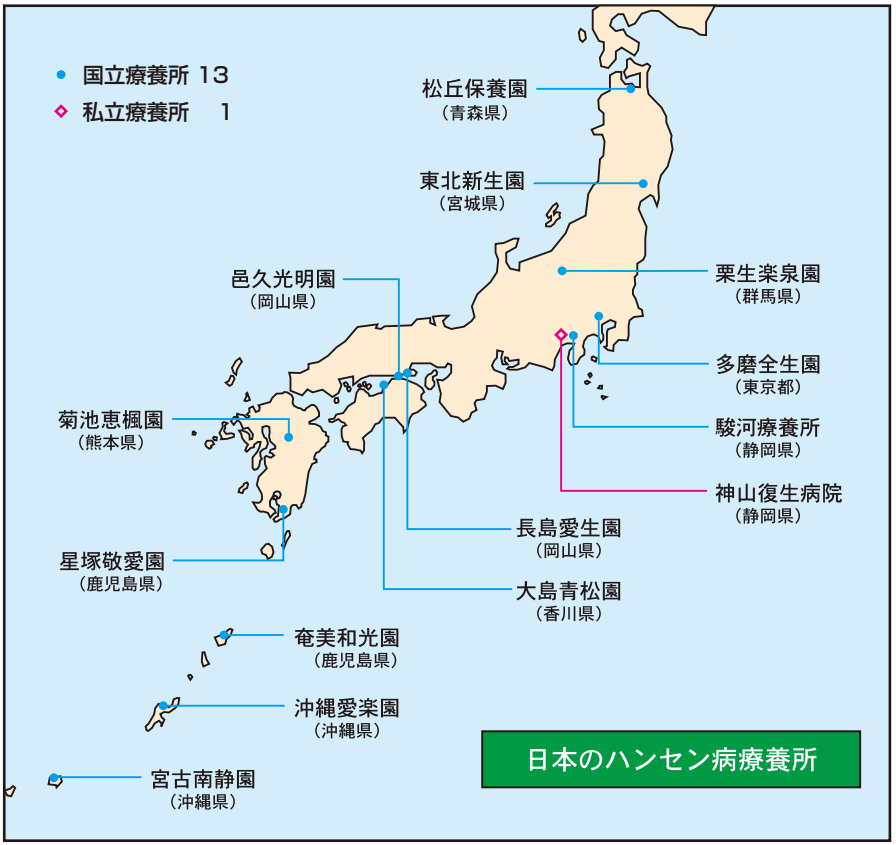
●同基金は2002年に創設され、タイ国のハンセン病コロニーで生活する子どもたちと働き手の教育・研修を支援するためのものです。

●同基金への寄付はいつでも受け付けています。

国立療養所　入所者数
2017年5月1日現在

	男	女	計
松丘保養園	33	51	84
東北新生園	28	43	71
栗生楽泉園	39	39	78
多磨全生園	80	96	176
駿河療養所	32	29	61
長島愛生園	102	84	186
邑久光明園	48	63	111
大島青松園	29	29	58
菊池恵楓園	107	137	244
星塚敬愛園	65	80	145
奄美和光園	10	19	29
沖縄愛楽園	80	80	160
宮古南静園	32	33	65
17年5月計	685	783	1468
16年5月計	744	833	1577
前回比	-59	-50	-109

2017/5<全療協・提供



6月・夏期募金のお願い

国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2017年度募金（会費・寄付）目標額　1,000万円

高齢者ケアをする阿部さん

タイ国ハンセン病支援事業

阿部看護師の活動と
タイのハンセン病活動支援のために
今年度820万円が必要です。

チャンタミット社は、ハンセン病コロニーの高齢となり、不自由度のました元患者を支援する活動をおこなっています。

国内ハンセン病支援事業

・療養所訪問・交流活動
入所者の思いの傍らに身を置くために。

・講演会・出版・啓発活動
元患者・入所者のいのちの尊厳と名誉回復のために。
ハンセン病問題の早期解決と「療養所の将来構想」の実現を願って。

タイ国のハンセン病に関わって

1982 年以来、好善社はタイに関わり、阿部春代理事（看護師）を 27 年間派遣するとともに、1987 年タイに設立された姉妹団体チャンタミット社（ハンセン病関係ＮＧＯ）への財政支援・人的交流を続けています。

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2017年5月１日現在入所者数1,486名となり、平均年齢は85歳。急速な高齢化です。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止21年を迎え、その間、「国家賠償請求訴訟」勝訴・「ハンセン病問題基本法」の施行など解決に向かっているかのようですが、いまだ「療養所の将来構想」「特別法廷」「元患者家族の賠償訴訟」など、十分な解決をみていません。

2017年度収支予算（抜粋・単位円）

療養所訪問・広報宣伝費		4,780,000
タイ国支援事業	・チャンタミット社支援	1,950,000
	・看護師派遣	3,850,000
	・現地調査・交流費	2,400,000
事業運営費		8,540,000
収入　会　費	ほか	4,810,000
雑収入	ほか	30,000
寄　付		7,000,000

2017年5月25日
公益社団法人　好 善 社　代表理事　三吉信彦
理事　棟居　勇　朝倉秀之　川﨑正明
加藤裕司　阿部春代　乗　圭子
本行輝雄

〒153-0065　東京都目黒区中町１丁目７－４　電話 03－3712－3845　FAX：03－3791－1150　振替口座 00160－7－70163
URL:http://www.kt.rim.or.jp/~kozensha/